

A47/06

## 関西地区の高大連携事業の実情について

林 齊 (相愛中学校・高等学校)

### 1. はじめに

学校教育において大学と高校との教育連携が取り上げられるようになり、活発に行われるようになってきたが、内容が一方通行で自己満足的なものも見られ、大学側、高校側がお互いに望む内容のものが展開されているかと考えると疑問を抱かざるをえない。高大連携事業というと大まかに分類すると、

- ① 高校生を対象にした講義等の提供
- ② 大学側と高校教員や教育委員会との交流
- ③ 大学入試合格者に対する入学前教育
- ④ 特別な関係にある協定校に対するプログラム

などの4つに分類される。今回、調査対象にしたのは①である。大学側が高校生に対して行う企画について、関西地区の私立大学関係者、高校の進路指導担当者にアンケートを送付し答えて頂いたものを分析した。

高大連携事業も④の内容は特定の学校の生徒に限られるものなので、不特定多数の生徒を対象にした企画に注目し、その大学からのヒアリングや、その企画に積極的に参加している高校からのヒアリングも紹介しながら、他の学校が高大連携事業を推進する際に役に立てばと考えた。

### 2. 高校進路担当者アンケート

平成22年6月～9月にかけて関西地区の全ての私立高校225校の進路指導部長(進路担当責任者)にアンケートを送付し、協力をお願いし、131校から回答を頂いた。(回答率58.2%)特に大阪においては大阪私立高等学校進路研究会の協力を得て、回答率77.2%に達した。

11項目の質問をしたが、注目すべきものを幾つか取り上げる。「関西の私立高校の進路担当者の声」と考えて頂けたら幸いである。

#### (1) 高大連携にどのような企画を望みますか。(複数回答可)

ア (不特定多数の生徒が参加できる) 大学での高校生向けの模擬講義	67人	51.1%
イ (協定校や付属校の生徒だけが参加できる) 大学での高校生向けの模擬講義	30人	22.9%
ウ 大学での通常授業への参加	28人	21.4%
エ 大学教員による出張講義(出前授業)	65人	49.6%
オ グループでの共同研究(テーマを与え大学教員指導のもとで、調べ論文を作成し発表。)	17人	13%
カ 与えられたテーマについて論文を応募し、大学教員が指導する	6人	4.6%
キ 高校教員向けセミナー	29人	22.1%
ク 入試合格者への入学前教育	56人	42.7%
ケ 大学生から学生生活や受験勉強の仕方を学ぶようなセミナー	41人	31.3%
コ その他	8人	6.1%

大学での高校生向けの模擬講義や出前授業を望む声が半数近く占めていて非常に多く、入学前教育や大学生からのアドバイスも求められている。高校生が大学の学びの実態を体験できる場を高大連携事業に期待していることが読み取れる。

## (2) 大学側の高大連携事業のPRの仕方について望むことは何ですか。(複数回答可)

ア HPを見ればわかるようにしてほしい。HPで申し込みが可能にしてほしい。	85人	64%
イ 郵便物でわかるようにしてほしい。	33人	25.2%
ウ 直接、担当者の方が説明にきてほしい。	24人	18.3%
エ 学校を通さず、生徒が直接申し込めるようにしてほしい。	28人	21.4%
オ 生徒が参加したときのメリットをわかりやすくしてほしい。	60人	45.8%
カ 生徒が参加したときの様子をDVDやホームページ上の動画で閲覧できるようにしてほしい。	19人	14.5%
キ その他	5人	3.8%

広報媒体としてHPが主流になってきていることから、HPで内容を理解し、申し込みまでを求める声があがっている。難しい注文かもしれないが、HPがうまく機能すれば、高校教員の関心が低い場合でも、関心の高い生徒に情報が伝わる利点もあり、是非とも前向きに考えて頂きたい点である。

## (3) 高校生が参加することで、期待することは何ですか。(複数回答可)

ア 学習意欲の向上	104人	79.4%	イ 専門科目に関する興味	40人	30.5%
ウ 調査し、まとめあげる能力	11人	8.4%	エ 大学の専門科目に関する関心	75人	57.3%
オ 人前で発表する能力	13人	9.9%	カ 他の生徒と協調して研究する能力	6人	4.6%
キ 他校の高校生との交流からの刺激	30人	22.9%	ク 大学生との交流からの刺激	37人	28.2%
ケ 大学教員との交流からの刺激	49人	37.4%	コ その他 ( )	1人	0.8%

高大連携事業の参加をきっかけに学習意欲を向上、専門科目への関心を高めてもらいたいという願いが強い。高校では体験できない大学教員や大学生との交流をきっかけにと望んでいるのが読み取れる。

## (4) 高大連携事業を生徒に参加させるとき、気になる点は何ですか。(複数回答可)

ア 学校行事との兼ね合い(定期テスト、文化祭など)	98人	74.3%	ウ 大学までの交通費	16人	12.2%
イ 大学までの通学時間や帰宅時間	46人	35.1%	エ 課題の量(学校の勉強をするのに負担にならないか)	20人	15.3%
オ 生徒に理解できる内容か	78人	59.5%	カ 大学生との関わり具合	13人	9.9%
キ 他の高校生との関わり具合	7人	5.3%	ク 1回の受講時間の長さ	11人	8.4%
ケ 受講するために通う回数	31人	23.7%	コ その他 ( )	4人	3.1%

学校行事との兼ね合いを気にしているのが伺える。後で紹介する大学担当者のアンケートでも高校の行事を知りたいと願っているため、このあたりの情報交換をスムーズに行うシステムなどが構築されることが望ましい。また、高校教員が熱心に薦めても、生徒に理解できないと意味がないので、高大連携事業の企画内容をしっかり伝えることが求められている。

## (5) 高大連携事業が盛んと感じる大学はどこですか。

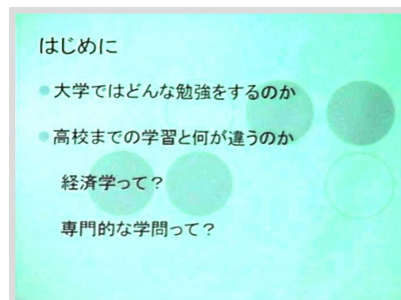
- |            |                               |           |           |            |
|------------|-------------------------------|-----------|-----------|------------|
| 1. 関西大……30 | 2. 立命館大……14                   | 3. 近畿大……6 | 4. 大阪大……5 | 5. 大阪市大……4 |
| 6. 京都大……3  | 7. 関西学院大、同志社大、帝塚山大、甲南大の4校が……2 |           |           |            |

1つだけ記入できる形式で質問した。関西大学(以下、関大と記す)が圧倒している。30の票であるが、各地域から偏りなく集めていて、大阪、兵庫、京都、奈良においては回答のあった高校の25%で関大を支持している。立命館大も3位以下を大きく差をつけている。高大連携事業はほぼどの大学でも行っているが、関西地区の高校進路担当者からは、自分の高校の併設大学や近隣の大学を除けば、特定の大学だけの認知度が極めて高い傾向にある。この2つの大学は高大連携専門の部署を持っているなど力の入れ方が他大学とは異なるから、当然の結果かもしれないが、他大学にも現在行っている高大連携事業を効果的にPRしてもらえたらと感じる。

関大は不特定多数を対象としたセミナーを複数行っているため概略を紹介したい。2008年のデータである。



関大ネックレスセミナー(2010年秋期:経済学部)の様子



同セミナーのパワーポイントの様子

分類	参加校数など	参加人数など	セミナータイトルの例
① Kan-Dai 1セミナー(出張講義型)	187 校	272 講座	教員による模擬講義
② Kan-Dai 3セミナー(公開講座型)	53 校	120 人	異文化体験セミナー
③ Kan-Dai 15セミナー(講義受入型)	20 校	88 人	マスコミと心理
④ Kan-Dai ネットレスセミナー(リレー講義型)	42 校	209 人	源氏物語の千年
⑤小・中・高校生対象のセミナー	13 講座	321 人	サイエンスセミナー

また、「何年生を対象にするものを望むか。」という質問には「高1・高2」が40.5%で最も多く、「実施してほしい時期はいつか。」(複数回答可)という質問には夏休みがトップで67.2%、次は「2学期」と「春休み」が全く同じ29.8%でした。

### 3. 大学高大連携担当者アンケート

平成22年7月～9月にかけて関西地区の私立大学より81校の抽出し、アンケートをお願いし、33校から回答を頂いた。(回答率40.7%)

13項目の質問をしたが、注目すべきものを幾つか取り上げる。「高大連携を企画する大学側の声」と考えて頂けたら幸いである。

#### (1) 貴校で実施している高大連携事業をすべて選んで下さい。

ア 高校での出前授業	33人	100%	イ 大学での通常授業への参加	20人	60.6%
ウ 大学で開講する高校生向けの講座	24人	72.7%	エ 高校教員向けセミナー	11人	33.3%
オ 学校インターンシップ(学生の教育現場体験)	13人	39.4%	カ 学校ボランティア(学生の派遣)	16人	48.5%
キ (作文コンクールなどの)コンテスト	8人	24.2%	ク その他( )	8人	24.2%

高校への出前授業はすべての学校で実施されている。その次に、高校生を大学へ招いて高校生向けにした講座があり、大学への授業の参加を認めているところもある。授業形式以外では、学生を派遣や作文などのコンテストを行っている学校も見受けられる。

#### (2) 高大連携事業の目的は

ア 将来の学生の確保のため	26人	78.8%	イ 近隣の高校に対する地域貢献のため	26人	78.8%
ウ 生徒が自分にあった学部等を選んでほしいから	31人	93.0%	エ 生徒の学習意欲を高めるため	15人	45.5%
オ 生徒の学力の現状を把握するため	1人	3%	カ 大学の企画力をアピールするため	3人	9%
キ その他( )	4人	12.1%			

学生の確保が第一の理由になると予測したがそうではなく、高大連携の担当者によると、この事業は生徒確保に必ずしも結び付かないようである。学生の確保に対する効果がみえにくく、選択肢イやウを目的とするボランティア要素が強いようだ。大学においても、ミスマッチによる意欲のない学生や中途退学者の問題に悩んでいるようで、この問題を解消したいのが伺える。

#### (3) 高大連携事業を企画するときに手に入りたい情報は

ア 高校教員の担当者名(高大連携、進路指導担当者など)	20人	60.6%	イ 高校側の学校のスケジュール(定期テスト、文化祭など)	23人	69.7%
ウ 生徒の受験科目	2人	6.1%	エ 生徒の志望大学	12人	36.4%
オ 生徒の志望学部	17人	51.5%	カ 生徒の学力(偏差値など)	8人	24.2%
キ その他( )	6人	18.2%			

高校の担当者と連絡をいかに密に取れるかがこの企画の成否にかかわるとの見方が理解できる。高校でのIT環境を知りたいと考えている大学もあり、インターネットなどを通じての高大連携も進められている。

#### (4) 高大連携事業に参加する生徒で困った点は

ア 私語が多い	8人	24.2%	イ 遅刻、欠席が多い	5人	15.2%
ウ 言葉使いを知らない	2人	6.1%	エ 文章作成能力が低い	2人	6.1%
オ 自分から動けず指示待ちの生徒が多い	7人	21.2%	カ 基礎学力が不足している	4人	12.1%
キ 目的意識が低く、意欲がない	8人	24.2%	ク 高校の教員から内容について説明を受けていない	8人	24.2%
ケ その他( )	11人	33.3%			

特になしとの回答もあったが、積極性に欠ける、知識レベルの個人差、生徒のモチベーションの低さなどが指摘されている。

また、「高大連携事業の目的が高校の教員にうまく伝わっていないと感じることがあるか。」に対し、「よくある」、「たまにある」の回答が45.5%で、その原因のほとんどが高校教員とのコミュニケーション不足である。「高大連携事業の目的が高校生にうまく伝わっていないと感じることがあるか。」に対して、「よくある」、「たまにある」の回答が57.6%で、その原因に高校生の思い込み、高校教員の説明不足、高校生、高校教員に対するコミュニケーション不足があげられる。

#### 4. 取材を通じて

上記のアンケート以外にも大学、高校の担当者にヒアリングする機会も持つことができた。立命館懸賞論文大賞に学校単位で参加し、学校賞を受賞した横浜雙葉高等学校の取材をする機会に恵まれた。同校では作文指導に力を入れていて、読書感想文をはじめ、様々なコンクールに応募させている。「高大連携の論文大会はテーマの設定も大変すばらしく、社会で話題になっていること、社会が求めているものなどを高校生からうまく引き出すようになっているので生徒に自信を持って勤めることができる。」と国語科の鷲津教諭は語られている。

龍谷総合学園のアドバンスプロジェクトもユニークで面白い。教育連携のある協定校に対するプログラムであるが、大学側からレポート課題を出し、DVD教材で課題にあった講義を受ける。3人1組で課題に取り組みレポートを作成する。そのレポートで選ばれたグループのみ、夏休み2泊3日で龍谷大学に招待され、大学教授指導のもと、大学院生のサポートを受け、レポートの精度を上げていく。最後にプレゼンを行い、優秀作品が表彰される。本来、大学3、4年生で初めて経験するゼミ発表を高校生のうちから経験することは意義深い。自ら主体的に調べることや、学問に対する動機付けが得られる。

各都道府県別の組織も定期的に活動している。大阪コンソーシアムでは夏休みに1つの会場で模擬講義を行い、国公立、私立問わずに多くの高校生が受講している。1つの大学でオープンキャンパス時に出前授業をするより、複数の大学の様々な授業を受けることができ、高校生にとっても利用しやすい利点がある。

#### 5. まとめ

高大連携事業が積極的に行われるようになり、今回注目した「高校生を対象にした講義等の提供」は、ほぼすべての大学で取り組んでいる。大学側、高校側もそれなりに期待して行っているものの、一部でしか浸透してない印象がぬぐえない。講義を受講したとき、内容や成果がわかりにくいことがあげられ、それゆえ、高校教員も積極的に生徒にPRしていない現状もある。高校教員としても、校務が忙しく、成果が明確でないと積極的になりにくい。ただ、参加させた高校担当者や生徒の声を聞くと、肯定的な意見が多い。今後、こういった声を広めていく広報手段(大学別でなく関西地区の高大連携事業を一覧できるようなサイトの構築など)を作っていくこと、さらにミスマッチを減らすため、高校と大学での意見交換会などを増やすことなどが必要と感じる。

#### 参考文献

- 勝野頼彦 2004年 「高大連携とは何か」 学事出版
- 関西大学広報室 2009年 「関西大学総合案内データ集」
- 静岡大学人文学部ホームページ 高大連携プロジェクト